百々裏話（45）

おもて　あきら

【音曲道歌雑考―その七―】

・歌の漢数字は本稿掲載道歌の通し番号、算用数字は当該道歌群中の歌順を示す。

(4)音韻・謡・鼓道歌（つづき）

―前回翻印の分に続く―

63、目より上下をはやすの習ひこそ
　遠き近きの心なりけり　（二二）

64、八つ頭小鼓五つ大鼓
　三つあるゆゑに八つ頭なり　（二三）

65、乱拍子版木のごとく思へとよ
　打すはゆかむと地はまつすぐに（二三）

66、身の器用習ひと数寄と三つの内
　数寄こそついの上手ならまし　（二四）

67、さし声の内はなかなか取り合はで
　合うて合はざるやうにあるべし（二五）

68、くりの内さしごゑよりは乗りて打ち
　少しの内も序破急を知れ　（二六）

69、小鼓の一調にては置鼓
　謡ひ手あらばもちろんのこと　（二七）

70、一声の二の句何より稽古せん
　舞の打切り切りくりのうち　（二八）

71、謡ひ手の上手にあはんその時は
　扇拍子を見るべかりけり　（二九）

72、物を着る段はうかりと打ちてよし
　次第一声舞にてもなし　（三〇）

73、羅綺のちやういたるやいれる秋の水
　かやうの所つゞみ打つまじ　（三一）

74、京ながし十四に六つ乙二つ
　頭二つに乙ひとつ打つ　（三二）

75、やまと流しちちちちとに父ちちと
　ととととたつたにはしりととと　（三三）

76、京がかり大鼓より打つと聞く
　やまとがかりは小鼓ぞ打つ　（三四）

77、惣別は上手よりこそ打ちてよし
　かかりだてすることぞ恥し　（三五）

78、一声の内の一声などといふは
　さし声前にあるを申すか　（三六）

79、王位公家御所や法印政所
　大名かやうのときは真の打ち上げ　（三七）

80、花守や山守木守塩くみや
　行脚の僧は草の打ち上げ　（三八）

81、作り物出でざる程は置鼓
　能のはじめに打たぬなりけり　（三九）

82、一声や次第なりともその中に
　作り物あらば心かはらん　（四〇）

83、猩々の乱れハりは二段目の
　扇かへすにかかる金春　（四一）

84、同じ能乱れことまり舞ひとまり
　立つても居ても和哥はいふなり（四二）

85、作り物松や桜や家斎垣
　かやうの物は置き替へぬなり　（四三）

86、土車花見車や舟などは
　いつ直しても苦しからじな　（四四）

87、次第二度あらん能には真草に
　次第の内の次第とを知れ　（四五）

88、夕顔の山の端定家夢かとよ
　かやうの鼓打ち打たぬさま　（四六）

89、同じ能といふとも面かはるべき
　事のありなば心かはらん　（四七）

90、響きなき所のはやしいかならん
　手もとばかりの味に打つべし　（四八）

91＊床几より今におりざるその前は
　油断の心持つまじきなり　（四九）

92、乱拍子翁のうちや謡ひとめ
　金春家の大事とぞ聞く　（五〇）

93、この三つは道者も知らじしらうとも
　知る人稀ぞ天が下には　（五一）

94、その名とて名人だてぞはかなけれ
　いさごに金枯れ木にも沈　（五二）

95、上手にはなかなか入らぬ事なれば
　わが下なりと慢じてはなに　（五三）

96、何の上もただ円かれよ〳〵
　角のあるには物のかかるに　（五四）

97、数ならぬ目にさへ見ゆる人の七
　わがなすわざをさぞ笑ふらん　（一五六）
98、わが寺の仏ばかりを尊がる
　余の教へをも嘆くべきなり　（一五七）
99、師は針ぞ弟子は糸筋なるべくは
　教へ違はば習ひゆるまん　（一五七）
100、胡椒をも丸呑みにする芸者こそ
　からき甘きを知らぬなりけり　（一五八）
101、松に吹く嵐も荻に吹く風も
　同じ心ぞ謡つゞみは　（一五九）
102、琴の緒を断つも理り何事も
　聞く人なくば辛苦してなに　（一六〇）
103、上手ト手聞き手や見手に舛るなり
　瑠璃に兄水に見くうてんや火と　（一六一）
104、能うたひ鼓の習ひあらはれて
　いつ名取り川埋もれ木の身に　（一六二）
105、六十まで嘆けど鳴らぬ小鼓を
　扨もはかなき人の慢心　（一六三）
106＊小鼓の一調にての謡をば
　三つ地の後に甲ひとつ打て　（一六四）
107＊をとろき手もはしる乙打ちがたく
　大事ははしる乙にて有りける　（一六五）
108＊かん高き鼓もいやし又低き
　刻み聞えずよき程ぞとき　（一六六）
109＊かけ声の高きもわろし慢じたる
　こいさしめるにじん常に有　（一六七）
110＊なり風情作りつけたも見苦しや
　ただ何となくなげくとそあれ　（一六八）
111＊相手をも気にあひもせよ合はずとも
　心に背く顔持ちなしそ　（一六九）
112＊嘗を真楽屋を行に舞台をば
　草の心にくつろぎてよし　（一七〇）
113＊思ふほど書きは尽くさじ藻塩草
　愚かなりとも愚かなる程　（一七一）
114、日本にあらゆる神もしろしめせ
　鼓打とは思ひこそせね　（一七二）

以上、二回に分載した「音韻・謡・鼓道歌」は、1～12は音韻関係の歌（冒頭の「五韻直拗二音之図歌」なる題名はこの十二首のみにかかるのであろう）、13～24、29、33～35等は謡関係の歌、27、30、84～86等は能、94～104等は能芸一般にわたる道歌であるが、最も多いのは38～83などの鼓関係の道歌である。この事実と、105、114の歌の内容から、この道歌群が小鼓を嗜む人の手によって編まれていることが推測せられる。

その点からも注目されるのは、鴻山文庫本がこの道歌群の前に、序の形で

△若き子共余りに無数寄に候間、いさめんがために、謡並章の心持乱舞之義、今禅鳳、岡氏昭、弥七、岡弥左衛門、美濃の与五郎（権）守、其外名人共になげきし事共、あら〳〵狂歌につらね申候。おろかなる心底より出す共、面白き事共あるべきか。

と言うことで、金春禅鳳父子や宮増兄弟の教えを基にしているというのは、直接の口伝であるかどうかは別として、かなり信じ得るのではなかろうか。たとえば、数寄を重視している66の歌が、禅鳳の『毛端私珍抄』の

惣而諸道は習ひと数寄と器用と三也。この三そろへばいづれの道も上手の名を得る也。一欠くれば中分なり。この三のうちにては数寄かんようならん哉。

の説と合致し、鼓を水に浮く物にたとえる36の歌が、禅鳳から葬儀因幡守に伝えたと信じられる『囃之事』に、

まず囃と申すは、水に物の浮きて流るる如くに、早き瀬を早く流れ、静かなる瀬を静かに流れ候やう也。

と言うのと合い、真草行の心得を説く112の歌が、同じ『囃之事』に、

祖父禅竹は真草行と申す事をば逆様に心得候と申され候ひつる。内を真に心え、楽屋を行に、舞台をば草に心得候と申され事、面白き事にて候。

とあるのと一致することなどからの推測である。鼓関係の歌にも、72が、宮増伝書に、

松風・柏崎など、かやうの類の物着る段

殊に大事の囃なり。心がけて囃すべし。
次第にてもなく、一声にてもなき物也。
拍子にのらぬ囃也

と説くのと関係が認められるなど、宮増兄弟の所説との共通点が多い。

一方、「音韻・謡・鼓道歌」は、暮松通春編と見られる『混沌懐中抄』の所説との関係も深い。二三例を上げると、22の「祝言は寒きかんとは何をいふ哀傷著きかんと思はん」の歌は、このままでは解し難いが、『混沌懐中抄』に

一、寒天祝言、炎天哀傷の事

とあるのを参照すると、歌の「かん」は「てん(天)」の誤写で、祝言謡を炎天に、哀傷謡を寒天にたとえた歌であろうと推測される。また23の「消え失せぬ絶えぬや尽きぬ〃ぬ〃の字こそあがりさがりて有りや無しなる」という難解な歌も、『混沌懐中抄』が「章の重き軽きにて各別する事」の条で、尽きぬ・失せぬ・消えぬ・絶えぬ・果てぬの五例にゴマ点を附して、完了の助動詞の「ぬ」と打消しの助動詞の連体形「ぬ」とでは章(アクセント)が違うべきことを主張しているのと呼応した内容である。99の歌も『混沌懐中抄』に

一、師匠肝要也。師は針のごとし。弟子は糸のごとし……

と言うのと一致している。冒頭部の音韻関係の歌にしても、『混沌懐中抄』が五音相通などの音韻関係について、別に口伝を設けて詳説しているのと無関係とは思えない。

また、「音韻・謡・鼓道歌」を通読して第一に感じられることは、114首の多くの歌を収めていながら、これまでに紹介してきた音阿弥百首系を初めとする他種の道歌群と同じ歌が全く無いことである。サシ謡にも鼓を捨つまじき由を述べた39が三と内容的には同じである程度の類似歌はあるが、同一と認め得る歌は存在しない。鼓関係の歌が多いのに、前々回に紹介した「集鼓之和歌」とも違い、むしろそこで漏れ残された事どもを歌の形に編んだ感が強い。これらのことは、この道歌群の作者(又は編者)が、意識的に従来から存在する道歌との重複を避けつつ歌を詠んだ(又は編んだ)ことを想像せしめるが、その点からも、この道歌群を収める内閣文庫本・鴻山文庫本ともに、暮松因幡守通春の伝書で、前半に音阿弥百首系の道歌群をも収めた本である事実が思いおこされてくる。

つまり、内閣文庫本や鴻山文庫本の永禄三年奥書に名の見える暮松通春こそが、「音韻・謡・鼓道歌」の作者ではないかと考えられてくるのである。暮松通春については『銭仙』114号(百々裏話25回)でもふれたことがあり、『日本文学誌要』15号(昨年六月)の拙稿「室町末期の謡伝書の性格(上)」でも考察しているので再論は避けるが、父祖が金春禅鳳から相伝を受けた伝書などに基づいて『混沌懐中抄』を編纂したと認められる人物で、永禄頃に謡の指南をしていたらしい金春系の半玄人である。彼ならば宮増関係の伝書を一見していた可能性も強く、「音韻・謡・鼓道歌」の作者に適わしいように思われる。前述した如くこの道歌群の作者は鼓を嗜んでいたに相違ないが、105・114の歌からも、むしろ鼓の専門家ではないように感じられ、暮松通風の如き、鼓についてもかなりの知識を持ったであろう人物の方が適わしいのではなかろうか。

鴻山文庫本と内閣文庫本との間に存在する歌数の相違や歌詞の異同も、勿論誤写による点も多かろうが、暮松が作者ならば、作者自身の増補改訂に由来するものと考えられてくる。事実、歌詞の相違には、作者自身の改訂と考えたい例が少なくないように私にも感じられる。歌数が少ない鴻山文庫本(に11を補った全百首)の形が原形であろうことは、言うまでもあるまい。

(42・1・5)